

令和6年度「六甲山森林整備戦略」森林整備に関する研究会 議事要旨

開催日時 令和6年3月5日(水) 14時00分~16時00分

開催場所 神戸市役所4号館1階本部員会議室+オンライン

1. テーマ別調査 市街地に隣接した森林における低林管理【新神戸駅北側】

- ・伐採したセンダンは3~4mの高さまで成長していたが、ニワウルシが繁茂して問題となっている場所でセンダンも匹敵するくらい伸びている例があるので、要注意である。
- ・萌芽枝の除伐後の再生に関しては、過去のデータを再検証してみる必要がある。
- ・検討資料 P5「伐採する枝や株の選び方」については、一本立ちさせた方がより安定するだろうという観点から、本数を減らす案2が一番望ましいのではないかと。
- ・斜面保持のためには株を枯らさないことが重要。一度にすべての萌芽を伐ると枯れるおそれがあるため、少し枝を残して順番に伐っていく輪伐がよいのではないかと。生き残らせることが最優先であるため、萌芽枝の太いものを残すことが前提となる。
- ・検討資料 P5「伐採する位置」に関しては、萌芽再生の確率を下げないために、案1が望ましい。

2. テーマ別調査 森林植生に対するイノシシの影響とその対策

- ・調査を始めて5年が経過しておおよその傾向が出た。再度ドライブウェイでは、小面積を柵で囲うと効果があるという、イノシシでは初の知見が得られた。
- ・密度調査の結果によると、令和4年は豚熱の影響によりイノシシの生息密度が10頭/km²以下と低かったが、令和5年になると生息密度が25頭/km²程度に回復している。
- ・二本松林道で行動を追跡している2個体は、行動範囲が非常に狭く、マテバシイ群落の非常に狭い範囲を利用している。餌資源が豊富なことによると考えられる。
- ・リターへの影響も大きいことが確認できた。
- ・森林を守るための電気柵が開発されており、農水省が豚熱の拡散防止に使い始めている。少し大きな面積や管理しにくい森林内で使ってみるのもよいのではないかと。
- ・農業被害がない山中では、捕獲のモチベーションがない。神戸の狩猟者とも話をしたが、本当は山の中で獲りたくないと言っていた。六甲山の森林保全のためにも、神戸市としてもっと積極的に普及啓発をしなければいけない。また、六甲山での罠の見回りは大変なので、体制の整備が必要。一気に広域的に減らすということは難しいので、どこかに試験地を設定して、調査することが第一歩である。

3. テーマ別調査 照葉人工林における小面積皆伐による更新（シラカシ群落）

- ・カラスザンショウの出現は、ギャップサイズの適切さをはかる指標になる。適切なギャップサイズの議論にあたり、今後のカラスザンショウの生育を定期的に見ておくのがよい。

- ・ギャップサイズとは別に、種子の供給ポテンシャルの有無についても整理が必要。

4. テーマ別調査 照葉人工林における小面積皆伐による更新（マテバシイ群落）

- ・基本方針は皆伐でよいが、樹種転換の難しさを考慮すると、実際に進める段階では、マテバシイがまだしっかり残っているところでは部分的に残しておいてもよいのではないか。
- ・マテバシイ群落の皆伐は、哺乳類相には大きな影響が生じる面積ではない。ただし、樹冠を使う哺乳類の調査を念のために行っておいたほうがよい。他の生物相も確認をしていただければ。
- ・マテバシイが六甲山に合っていないということであれば伐採もやむを得ないが、伐採後の目標植生の設定は必要である。

5. 整備の実施状況について（状況報告）都市山防災林整備事業の効果検証

- ・当初の目標林はスギの人工林だったはずだが、下層に夏緑性高木種が入ってきたことで混交林化という話が出てきている。新たな目標林の設定が必要ではないか。
- ・これまでの都市山防災林整備事業は順調に進んでいるようである。低林や低木林管理は今後の検討課題である。

6. 新規整備エリアの整備方針

- ・照葉樹が優占している状況から夏緑樹林に変えるのは非常に大きなエネルギーが必要なため、照葉樹林を目標林として設定することは仕方ない。ただし、なるべく落葉樹を残して、照葉樹林化を遅らせるようにするべきである。
- ・道路沿いにシラカシ林が分布している。シラカシは有効土層が十分でない場所で倒木しやすいため、思い切って伐ってよいのではないか。
- ・道路沿いの危険木の伐採などが重要である。落石の危険性も考慮する必要がある。

7. 六甲山森林整備戦略の改定について

- ・森林整備の方針の中に、「防災」や「減災」という言葉を入れておいた方がよい。
- ・生物多様性や景観保全という言葉を入れたほうがよい。
- ・全市的な戦略ということで里山やニュータウン周辺にも言及しているが、都市山、里山、まち山のセットで説明すると迫力がある。
- ・ニホンジカの分布拡大に対する防衛ラインを見える化するとよい。
- ・帝釈丹生山系では、現状のグレイインフラの状況を整理しながら、併せてグリーンインフラをどう変えていくのかという発想でまとめると新たな視点が見えてくるのではないか。
- ・地震発生時の山崩れに対する植生の機能は重要な検討課題である。
- ・森林整備の方針を見ると、資源循環や森林との関わりに言及されており、資源を活用することに力点が置かれているような印象を受けた。